

日本の埋蔵金



岡 田 文 夫
おか だ ふみ お

大正9年東京に生る 上智大学商学部卒

現在 毎日新聞社調査部勤務

現住所 埼玉県大宮市堀ノ内1の315

日本の埋蔵金

¥ 270

1964年6月30日 発行

ハヤカワ・ライブラリ

著 者	岡 田 文 夫
発 行 者	早 川 清
印 刷 者	堀 内 文 治 郎
製 本 者	小 泉 喜 久 松
原色印刷	東京写真印刷株式会社

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2/2

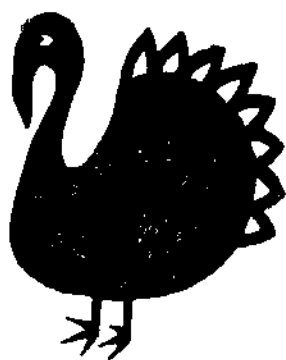
電話 東京 254局 1551~8

振替 東京 47799

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします (堀内印刷・明泉堂製本)

日本の埋蔵金

岡田文夫



HAYAKAWA LIBRARY

ハヤカワ・ライブラリ

財宝への招待

時価三億円もの土地と貸ビルの持主が、東京日本橋の町角で宝くじを売っていた。師走の寒空に外套も着ず、色あせた木綿のジャンパーに黒ラシャのズボン、紺のハンチング姿から、誰が億万長者の事業家を想像できるだろうか。当時八十一歳のUさん（昭和三十五年）は木枯らしの吹く町角の三脚に腰かけて宝くじを売りながら、「遊んでいてはもったいないからね、もう十年からもうやってますよ」とつぶやいていた。彼は充分に幸福だったにちがいない。人の幸、不幸は、はたから眺めただけではわからない。大金持のなかにも、自分は不幸で、みじめだと悲しみながら一生を終る者もいる。そんなに金持でなくても、身も心も満ち足りて幸福を味わいながら生活を楽しんでいる人もいよう。

運命は切り開き、築きあげていくのだと信じている人も少なくないし、運賦天賦は授かりものさ、と割りきっている人も多い。東京都目黒区の貴金属商、大山さんは金もののべ棒など時価百三十万円相当をタクシーの中におき忘れた。正直な運転手が届け出たところ、十三万円のお

札を贈った大山さんは、「出て来ないとあきらめていたものだったから、厄落しのつもりで……」と、その百三十万円分をそっくり社会施設に寄付してしまった。ご当人は、これで幸福なのに違いない。

時価四百二十万円という真物のダイヤモンドを道路で拾いながら、どうせ模造品だろうと放っておいたばかりに、お上に召しあげられて一文にもならなかったどころか、横領の疑いで書類送検された男もいる。密輸品だったらしく、所有者はついに現われなかったから、すぐ届け出ていれば、やがてはそっくり頂戴できたはずだった。五年も十年も拾い屋をして、人の落し物を探して歩いていても、せいぜい百円玉ぐらいだという世の中なのに運のないときは、こんなものである。何百万円分もの古銭を、偶然に畑で掘り当てる人もいれば、祖父の代から古文書を頼りに掘り続けてもピタ銭一枚も出てこずに身代限りをする悲劇の主人公もいる。

若い頃から放蕩三昧、悪辣無道だったような男が八十、九十まで長生きして長者みたいな一生を終るかと思えば、実直謹厳で情深い近所のほめられ者が、わが家の玄関先きで自動車にはねられて無惨な死に様をするような話も珍らしくはない世の中である。とにかく真面目に生きよう、とは心がけるものの、果して「正直者の頭に神は宿る」ものかどうか、いつの世だって疑わしい。あるいはまたほんとうに「果報は寝て待つ」べきものか。わが国の昔話などには、それこそ横の物を縦にするのもおっくうがるような物臭太郎や三年寝太郎みたいな奴が、かえって棚からボタ餅式に財宝を手に入れたり、お城のお姫さまに見染められたりしている。

こんなことを考えてくると、ほんとうにあった財宝追求の悲喜劇や、昔話、伝説など、民間文芸上の禍福綾なす物語の真相はいったいどうだったのかをまず知りたくなる。そうした物語の意味するところ、事件の真相を通して日本人の運・不運や、幸・不幸もうかがえるというものだろう。いっそ手取早いところでと、贋札を作ってみたところで、果してそれで億万長者になった歴史はあったのだろうか。合法的に宝くじで一山はあてたところで、持ちつけぬ大金に身をあやまった者が多いという。

「山の彼方の空遠く、幸い住むと人のいう……」と歌いはするものの、営々と祖先伝来の土地を耕す者の住むこの里の足許で、幸せは、わが手につかめぬものなのだろうか。いやいや、これまでの地下財宝の発見、発掘の一覧表を作ってみると、この日本の狭い地面にだって、地表の全部をめぐって見たら、何百億、何千億もの金銀財宝が埋まっていることは推定できそうだ。さればといって、ただ盲滅法に片端から掘り返すわけにもいかず、隣家の地面だって、勝手に掘ったら大変な騒ぎになる。せめてわれわれは、事実譚や物語で、そんな欲望を満足させ、明日はやっぱり昨日と同じように味気ない勤めに出かける方が無難かもしれない。

それにしても、各地各時代の実例や、民間文芸上の、かずかずの財宝獲得は、果してこぼれざいわいの僥倖が多かったのだったろうか。それともやはり前世からの約束ごとだったのか。あるいはまた神仏の恩寵に帰一するものか、臥薪嘗胆の賜物だったのであろうか。事実と文芸の解明のなから、われわれ自身が、歴史の跡をふりかえってみるほかはなさそうである。

人それぞれの幸福がちがうように、財宝とか宝物の種類もまた人により時代によって、さまざまに移り変って来た。貨幣が今ののように万能でなかった時代、貨幣の流通していなかった時代の財宝が、札束や大判小判であったはずはない。

かつては日本軍も転戦したニューギニアに住むバリューム族たちは、今もなお貨幣のかわりに貝殻を使っている。バリューム族たちの一日の日当は寶貝三個、花嫁の交換価値は寶貝百個ぐらい。オランダ政府は、ここらで通用する寶貝を飛行機で運びこんでは作業賃金の代りにしている。近頃では、この貝の通貨額も増大しているということだが、硬貨や紙幣を欲しがる者は一人もいなくて、この貝殻を貴重品扱いしているという。彼らにとって大切な財宝は金貨銀貨ではなくて、今なおこの貝殻なのである。

島崎藤村の「椰子の実」の詩を想い出してみるまでもなく、日本の海岸には久しい昔から、八重の潮路をただよって自然に南方の椰子の実の流れつくところが各地にあった。寶貝は子安貝と同じもの。安産の呪物になるという信仰から、子安貝という名が出たという。裏側が女性の性器にごく似ている形状が、女性を表象させ、生殖、豊熟を連想させたものであろう。寶貝は世界各地の遺跡からも出土しているし、中国大陸でも古代は貨幣のかわりに使われており、日本でも石器時代の遺跡からいくつも発掘されている。かつては宝物やお守りだったことは、『竹取物語』その他の本にも書きとめられている。わが国の貨幣鑄造の歴史は八世紀からだ、平安中期から室町時代まで（十一—十五世紀）は、外国製の貨幣を使い、今のような金銀銅

の国産貨幣を通貨とするようになったのは室町末、桃山時代（十六世紀）から。

それにしたところで、日本人みんなが現代のように、何から何まで硬貨や紙幣で売買していたわけではなく、物々交換は昔ほど多かったばかりか、自給自足の暮しでは、よくよく錢を使う機会は少なかったのである。日本人にとって、金錢を財宝のすべてと考えるような時代は、ごく新しく、まだ歴史も短い。錢さえ積めば、何でも手にはいる世の中が昔からだったのではなく、札束を手に入れるために銀行を襲い、人を殺傷した歴史はまだ浅い。貨幣經濟の社会では、欲望充足にもっとも便利な札束がまず第一の財宝だが、それにかわる物として貴金属があり、また錢では買い求められない人間の命、寿命は、なおいっそうの貴重品である。また富も権力も有りあまる男にとって、傾国の美女が何物にも代えがたい宝物にもなろう。今の日本人にとっては、せいぜい安産のお守りにすぎない、ただの貝殻のために人を殺し、自分の命も賭ける種族も現存している。金持の老人にとっては、老後の寿命が宝であり、親にとっては子が宝、貧しい娘にとっては一張羅の晴着が命の次の宝物かもしれない。

物欲を満足させる物だけがまた、日本人にとって唯一の宝でなかったことは、日本語の果報とか幸福とかにふくまれた内容を吟味するとわかってくる。上州あたりの子供たちは着ている着物を一枚、二枚と数えるときにまた「徳・福・宝……」とも数える。まあ、ともかくも、あなた自身の果報や福德は、この本をお読みになってから、じっくりと考えていただくことにしよう。

目 次

財宝への招待	三
--------	---

第一部 埋もれた財宝をさぐる

1 軍用金始末記	一七
----------	----

南会津に日本軍の白金十数億	一七
---------------	----

四国櫛梨城のなぞ	二〇
----------	----

小栗上野介の埋蔵金	二三
-----------	----

秀吉が埋めた軍用金	二六
-----------	----

2 虚実をめぐる海賊の財宝	三三
---------------	----

トカラ諸島に海賊キッドの秘宝	三三
----------------	----

伊吹島の秘宝探し	三九
----------	----

3 ソロモン王秘宝の行方	五一
--------------	----

4 海底に眠る沈没船の金塊	五三
---------------	----

八阪丸の大金塊	五五
---------	----

伝説秘めた南蛮船デウス号	七四
--------------	----

香川県男木島沖に金塊時価数億……………七七

“幽霊船”大阪丸……………七九

5 黄金の国ニッポンのゴールドラッシュ……………八四

伊豆長岡黄金の夢……………八四

土肥金山と慶長小判……………九〇

佐渡の金山を制するもの……………九三

アイヌの“黄金の船”……………一〇三

6 造られた宝……………一〇九

ニセ札……………一〇九

宝くじ物語……………一二三

7 花咲爺の現代版……………一二八

拾ったダイヤ……………一二八

北宋銭二万五千枚——鹿屋市……………一三〇

長野の旧家の裏庭から出た古銭……………一三〇

深谷の農家から古銭……………一三二

水沢市の水田から古銭……………	一三
下館市の塚から古銭……………	一三
鎌倉長谷寺境内から中国古銭……………	一四
続出する小判——目黒と深川で……………	一四
農家で古地図発見——群馬県太田市……………	一五
天井裏に小判四十枚——足利市で……………	一六
母の遺言で庭から小判——千葉の市川で……………	一七
“銀座で小判”しめて二百九万円……………	一八
子孫のために百万円の小判……………	一四
小判、二朱金で五千六百万円——東京日本橋新川で……………	一五

第二部 財宝を説話にさぐる

宝ものが地下から出るわけ……………	一五
宝の山へいたる目印——味噌買橋……………	一六
地下から出たがっている埋蔵金……………	一六
黄金を捨てていた炭焼長者……………	一六

芋掘が金持になる話	一七三
「舌切雀」のくれた宝もの	一七六
宝の手拭——若い女に福運	一八三
見るなの座敷	一八九
向うからやってくる財宝	一九三
怠け者が大金持になる話	一九七
大歳の客	二〇四
長者の資格——長者になる人、なれぬ人	二二一
だれが宝を手に入れたか——致富物語の哲学	二三〇
あとがき	二三五

第一部 埋もれた財宝をさぐる